

令和八年度 松山短期大学 一般選抜試験

国語

令和八年三月三日 実施

解答はすべて解答用紙に記入し、
解答用紙のみ提出すること。

問一・次の各設問に答えよ。

1. 次の(一)～(五)の言葉を漢字四文字で作られた熟語(四字熟語)に直せ。

- (一) じだいさく
- (二) いみしんちよう
- (三) いくどうおん
- (四) きようてんどうち
- (五) じゅんぷうまんぱん

2. 次の(一)～(五)の四字熟語の読みをひらがなで記せ。

- (一) 暗中模索
- (二) 上意下達
- (三) 明鏡止水
- (四) 前人未踏
- (五) 千載一遇

3. 次の(一)～(五)の語と意味の最も類似した語を【 】の中からそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

- | | | | | | |
|------------|---|------------------------|--------|--------|---|
| (一) 利発 | 【 | ① 聡明 <small>そう</small> | ② 功利 | ③ 多感 | 】 |
| (二) 無類 | 【 | ① 無名 | ② 無限 | ③ 無比 | 】 |
| (三) 領域 | 【 | ① 分野 | ② 分包 | ③ 分布 | 】 |
| (四) うんざりする | 【 | ① 渴望する | ② 我慢する | ③ 食傷する | 】 |
| (五) ややもすると | 【 | ① 往々にして | ② 複合的に | ③ 偶然にも | 】 |

4. 次の(一)～(五)の語に対して対照的な意味の語を【 】の中からそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

- | | | | | | |
|-----------|---|--------|--------|---------|---|
| (一) 支配 | 【 | ① 従事 | ② 従順 | ③ 従属 | 】 |
| (二) 略解 | 【 | ① 注解 | ② 詳解 | ③ 明解 | 】 |
| (三) 疎遠 | 【 | ① 親密 | ② 親交 | ③ 親愛 | 】 |
| (四) しとやか | 【 | ① がさつ | ② ひたむき | ③ 年相応 | 】 |
| (五) おもはゆい | 【 | ① 気味悪い | ② 堂々たる | ③ 恥ずかしい | 】 |

5. 次の(一)～(五)の言葉の意味として最も適切なものを【 】の中からそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

- | | | | | | |
|-------------|---|-------------------|-------------|-----------|---|
| (一) 「水を向ける」 | 【 | ① 静まりかえる | ② 誘いをかける | ③ 相手を追い払う | 】 |
| (二) 「足を洗う」 | 【 | ① 悪行をやめて、まじめになる | ② 誘いをかける | ③ 相手を追い払う | 】 |
| | 【 | ① 悪行をやめて、まじめになる | ② 不浄な身体を清める | | 】 |
| | 【 | ③ 一息ついて、ゆっくりとくつろぐ | | | 】 |

(三) 「肝を潰す」

- 【 ①物事の核心を見誤る ②大いに驚き恐れる
③再起できないほど徹底的にやっつける 】

(四) 「肩で風を切る」

- 【 ①苦しそうに呼吸をする ②大変な状況でも平気そうにする
③威勢よく得意な態度を見せる 】

(五) 「やぶさか」

- 【 ①物惜しみするさま ②気前が良いさま
③細かなことにも警戒し、びくびくするさま 】

問二・次の文章を読み、設問に答えよ。

苦痛が人間を浄化する——兄・小林秀雄の信条

高見澤潤子（劇作家）

評論家の佐古純一郎さこじゆんいちろうさんが、河出書房で編集に携わっていた時、仕事で、旅館にこもっている兄（小林秀雄）の姿に接しました。兄は佐古さんが来られることなど知らなかったのでしょうか。四つんばいになって、その①ザシキをはいまわっていたそうです。それほどに苦しんで、苦しんで、厳しく仕事していたのです。

「喜びといっても、苦しくなければ喜びなんてありません。学問する人はそれを知っています。嬉しい嬉しいで学問をしている人はいない。困難があるから面白いのです。やさしいことはすぐつまらなくなります。そういうように人間の精神はできているのです。だから子供の喜びとは違うのです。喜びというものは、あなたの心の中から湧き上がるのです」

これは、兄が全国の大学生、三、四百名を集めての思想研修で五回講演したその一つで、講演後の質疑応答の一部です。

いまの人は苦しむことを嫌がります。苦しみの尊さなど考えもしません。苦しみが喜びになる経験などしようともしないでしょう。しかし、兄はこうもいいました。

「苦痛が人間を浄化する時、人間は苦痛に敬礼する。此の敬礼こそ人間の歓喜である」
強い精神は、苦痛を苦痛として②チュウジツに経験していきます。そして、その苦痛が決して無駄ではなく、却って成長させてくれたことを知って、喜ぶのです。苦しみに負けてはいけません。苦しみに勝つ強い精神を持たなくてははいけません。

信仰を持つ者は、たいいてい苦痛を感謝して受け入れる精神を持つことができます。兄は、このような言葉がいただける、大きな魂に対する信仰を持っていたともいえます。

③この苦痛に対する姿勢は、私たちが日常生活で味わうさまざまな体験についても同じことがいえます。

『カラマアゾフの兄弟』の中で、ドストエフスキーを評して、体験ということ語っています。

「彼は、何も彼も体験から得た。生活で骨までしゃぶった人のする経験、人生が売ってかれるものを踏み倒したり、値切ったりしなかった人のする経験、自己防衛術を少しも知らず、何ごとにもめりこめた人のする経験、さういふものから自分は、何も彼も得たのだ、さういふ彼の声が、書簡の何処からでも聞へる」

経験は大事です。私たちは経験によって人間ができていき、精神もゆたかに成長していきます。しかし、その経験の仕方、その深さがぐつと違ってきます。

たいいていの人は、その経験がいかげんで、④ダサンので、自己防衛的で楽なことばかり望んでいますから、せつかくの経験は貧しく弱く、自分を成長させるどころまでいきません。⑤本当の経験になっていないことが多いのです。

私は、このドストエフスキーの経験のことを述べた兄の文章に、そのまま兄の姿を見るよ

うな気がします。

（藤尾秀昭監修『1日1話、読めば心が熱くなる365人の人間学の教科書』による。
ただし、本文の一部を改変した。）

設問

（一）傍線部分（1）（3）を漢字に改めよ。

（二）傍線部分(a)「この苦痛に対する姿勢」とは、どのような姿勢のことか。本文中の語句を用いて説明せよ。

（三）傍線部分(b)「本当の経験」とは、どのような経験のことか。本文中の語句を用いて説明せよ。

問三、次の文章を読み、設問に答えよ。

カテゴリー化の誘惑

(a) 人間は、知らず知らずのうちに物事を分類して生きている。物や人の似ているところをほとんど無意識的に探し、一つのカテゴリー(集団・集合)にまとめる。そして、異なるカテゴリーの間にある違いを強調しはじめる。たとえばつい、日本人という集団と外国人という集団を区別し、「日本人と違って外国人は〇〇だから」と言ったり、男性と女性を分けて、「男性と違って女性は〇〇だから」と言ったりしてしまう。

このカテゴリー化は、人種や国籍、性別などの大きい集団よりさらに小さい単位でも生じる。「うちの大学と違ってA大学の人は〇〇だから」「うちの会社と違ってB社の人は〇〇だから」「うちの市と違ってC市の人は〇〇だから」。このように、人間は無意識のうちに、世界に境界線を引いて生きている。

人間の情報処理能力には限界がある。カテゴリー化は、物事を雑多な個として見るのではなく、集団・集合として見る分、情報量が少なく脳への負担を減らしてくれるという点で、便利なツールでもある。B社について語るとき、いちいちB社に属するすべての人の特徴を考えて話すのは現実的ではない。

自他を「分ける」思考の罠

ただ、(b)カテゴリー化にはいくつかの負の側面がある。

まず、「自分が属する」集団(たとえば日本人)とその他(たとえば外国人)を分けることで、自集団をひいきし、その他の集団に対して否定的な態度をとることが多くなってしまう。このような傾向は、実は集団間に明確な違いがなくても生じることがわかっている。

運動会ではチームを分けることが多いが、たまたま紅組になった人は自分の属する紅組を(1)オウエンし、白組に負けて欲しいと思うだろう。紅組と白組を分ける基準は特にないにもかかわらず、自然と紅組を味方と認識して、白組が敵となってしまう。

たまたま日本人として生まれてきた人は、自らを日本人として認識し、他の国やそこに生まれた人を敵視しないまでも、日本の良いところ、日本人の良いところを探してしまう。大谷翔平の活躍に多くの人が(2)ネツキョウしているように、世界で日本人が活躍すると自分のことのように嬉しい。

これは、性別でも同じことが言える。たまたま男性として生まれた人は、自らを男性グループの一員と認識し、女性を別のグループとして認識する。そして現代社会では、社会のいたるところで性別を意識させられる機会があるため、この認識は時間とともに無意識のうちに強化される。パスポートには性別が記載されているし、「女性枠」という優遇策も男性・女性というカテゴリーを否応なく意識させてしまう。

もちろん人のアイデンティティが多層的であることにも留意しなければならない。

たとえば、広義の「女性」というカテゴリーに分類されている人々の中であっても、男性を好きになる人、女性を好きになる人、好きになる人の性別を問わない人、恋愛感情をそもそも抱かない人など、性的指向はさまざまだろう。自分が同性愛の女性グループに属している、そのグループに最も親近感があるという場合には、女性であっても他の性的指向を持つ女性グループに反感を抱くこともあるかもしれない。

カテゴリー化のもう一つの問題は、集団を線引きした後に、自分が属しているかないかにかかわらず、集団に何らかのレッテル（社会的評価）を貼ってしまう点である。

日本を訪れる外国人旅行者が近年急増しているが、日本人に貼られるレッテルの中には「日本人は礼儀正しい」という（一見）ポジティブな評価もあれば、「日本人は本音を言わない」というネガティブな評価もある。そのような評価に基づいて、「日本人は○○だから」という言葉が顔を出すと、差別につながる。「女性は数学ができない」という評価が差別につながるのと同じロジックである。

人はついつい、一人一人の個性を無視して、何人か、男性か女性かといった大きな括りで見えてしまう。そうしたカテゴリーに社会的な評価が紐づけられたとき、「押し付け型」差別につながる回路が起き上がる。

そして、カテゴリーに一度含めたはずの他者がその集団に対して持つイメージからはみ出そうとすると、脳が危険信号を出す。「日本人は礼儀正しいのに、なぜあなたは違うのか？」これが「日本人なのに○○」という「懲罰型」差別につながっていく。

このようにカテゴリー化は、集団への社会的評価を生み出し、差別の前提となっていることがわかる。

「はじめまして」でも生じる差別

ここで、個人が複数の集団に属するとして（○○県出身、××大学卒、△社のAさんなど）、人はどの集団カテゴリーをもとに他者を分類するのだろうか。たとえば事前情報が無い状態（年齢や出身校なども知らない）で初対面の人に会ったとき、あなたはその人を、どのように認識するだろうか。

年齢カテゴリーを使って、「Aさんは年配か（あるいは若い人か）」と無意識に考える人もいるかもしれない。多民族国家なら、人種カテゴリーが重要で、「Aさんは白人か（あるいは非白人か）」と意識することもあるかもしれない。外国人労働者が増えた日本でも「日本人か外国人か」という点の一つの判断基準になってきているかもしれない。

しかし今の日本においては、初対面の相手をカテゴリー化する際、性別が最も大きな判断基準になっているのではないだろうか。事前情報がない誰かと初めて会うとき、頭の中で、「Aさんは女性か」、あるいは「Aさんは男性か」とほぼ無意識のうちに性別で分類してしまっていないだろうか。

仮にそうであるとすれば、「女性」「男性」というカテゴリーにはすでに社会的な評価が紐づけられているので、わたしたちは無意識のうちに「女性のAさん」を見たときに「女性だから〇〇だろう」と考えてしまうことになる。

そして、Aさんが他の女性とは違う言動をするとAさんは「女性なのに〇〇」と感じてしまう。「女性」という集団を意識することで、「男性」との差が強調され、それぞれの社会的な評価をあてはめてしまい、その結果として、差別が生じてしまうのである。

ということは、「女性」という集団を意識する機会が少なくなれば、集団に社会的評価が紐づけられる機会も減少し、差別につながることも減るかもしれない。

ではたとえば、ファンタジー小説のように聞こえるかもしれないが、「女性」（そして「男性」というカテゴリーそのものを解体してみるのはどうだろうか。

さらに大きなカテゴリーへ

人はどうしてもカテゴリー化をしてしまうので、いきなり女性を「女性」として見るなどというのは無理な話かもしれない。女性を恋愛対象としている男性は、「女性」というカテゴリーをいきなり取り払うように言われても、難しいと感じる人が多いだろう。

では、無理のない提案として、より「大きい」カテゴリーに「女性」も含めてみるというのはどうだろうか。

たとえば、同じ会社にいる人を皆「同僚」と括れば、自分と相手も含めて、より多くの人がこのカテゴリーに属することができる。男性も女性も、障がいを持つ人も、全員「同僚」ということになり、はみ出すものが少なくなるはずである（たとえば「女性」のAさんではなく「同僚」のAさん）。「同僚」を主たるカテゴリーとして考えると、他のカテゴリー（たとえば「女性」）につきまとう社会的評価を気にすることは少なくなるかもしれない。

ただし、「同僚」という集団にも（他者・他社からのものも含めて）社会的評価がつきまとうので、カテゴリー化の呪縛からは完全には逃れられない。日本に住む人を「男性」「女性」としてではなく、すべて「日本人」として見るとしても、「日本人」に対する社会的評価は存在するので（たとえば海外の人からの評価）、それが「日本人」にも、「日本人」ではない他者の行動・考えにも影響を与えてしまう。

その人をその人として見る

そう考えると、大きなカテゴリーではなく、より「小さい」単位のカテゴリーで人と接することも一つの手かもしれない。

究極の最小単位は、「個人」である。人を何らかの社会的集団の一員としてではなく、一人の個人として扱うということだ。扱う情報量が多いため、その分、脳への負担は大きくなるだろうが、カテゴリー化がもたらす弊害、たとえば自集団びいきや集団にレッテルを貼ることから来る差別は生じにくくなる。

「個人」として人を見るということは、たとえば、「同じ会社の日本人の男性」には、会社についての社会的評価、日本人としての社会的評価、男性としての社会的評価が伴ってくるが、それらをすべて取っ払って、一人の人として見るということである。

ただし、これは「人間」あるいは「地球人」集団の一部として人を見ることは全く異なる。結局、集団としてのカテゴリー化は、その集団内の同一性を強調してしまうことにもなるからだ。そうではなく、その人を個人として見ることで、人それぞれの個性はいつそう強調されることになる。たとえその人に何かネガティブな特徴があっても、それは集団とは関係のない、その人個人が持つネガティブな特徴であって、集団についてまわる社会的な評価がその人に影響することはない。

もちろん、カテゴリー化のレベルを変えることができる人が増えたとしても、社会に蔓延する格差がただちに解消することはないだろう。

それでも「数学ができない」というおまじないのような社会的評価が、格差を長期的に生んでいることを考えれば、より多くの人がこのような努力をすれば、徐々にではあるが、抵抗勢力を生まない形で社会は変わっていくだろう。少なくとも、こうした努力をする人たちについては、「女性だから」「女性なのに」という考え方をすることは減るからだ。

カテゴリー化をなくす具体例

そしてこの「カテゴリー化のレベルを変える」キャンペーンはファンタジーではない。カテゴリー化について明確には^③ 与えられていないが、近年よく見かける「ジェンダーレス」や「多様性(ダイバーシティ)」はこの考えに近い。

「ジェンダーレス」とは、仕事や社会における男女の区別をなくして、社会に存在する性差別・格差をなくしていこうという考え方である。

日本でも、看護師から看護師、保母から保育士へと、いくつかの職業の名前が変わったが、これは「看護や保育は女性がやる仕事」という考えを改める意味がある。ファッションでも男女の違いを意識しない服が増えてきたし、学校でも「Aくん」「Bちゃん」と言うことが少なくなってきた。「Aくん」と呼べば、ついAが男の子であるということを意識してしまう。「Aさん」と呼ぶことで、周りの人もA自身も、男の子に紐づけされた社会的評価を意識することが少なくなる。

繰り返しになるが、ここで重要なのは、「男の子のAさん」や「女の子のBさん」とカテゴリー化しないことであり、一人の子どもを個人として見ることである。人はなかなか習慣を変えられないので、無意識的に「Aさんは男の子だから」という考えが生まれてくることは仕方ない。ただその場合でも、できる限りカテゴリー化の回数を減らす努力をすることが重要となる。

いやいや、私は「男の子」を「Aくん」と呼びたいし、「女の子」は「Bちゃん」と呼びたい。「俳優」ではなく「女優」と呼びたい。そう考える人は多いかもしれない。もちろん、

それ自体は個人の自由だろう。

しかし、こうした呼び方によるカテゴリー化が、男性や女性に対する社会的評価の押し付けにつながっていること（中略）についても、一度立ち止まって考えてみてほしい。

（田中世紀『なぜ男女格差はなくなるらないのか』による。ただし、本文の一部を改変した。）

【注】

「押し付け型」差別……ある集団に属していると認識される人が、その集団に対する社会の一般的な評価に従うべきとされることで生じる差別のこと。

「懲罰型」差別……ある集団に属していると認識される人が、その集団に対する社会の一般的な評価に従っていないとみなされることで生じる差別のこと。

設問

(一) 傍線部分(1)と(3)を漢字に改めよ。

(二) 傍線部分(a)について、人間が「知らず知らずのうちに物事を分類して生きている」のはなぜか。その理由を本文中の語句を用いて説明せよ。

(三) 傍線部分(b)について、カテゴリー化がもつ「負の側面」を、本文中の語句を用いて説明せよ。

(四) 本文において、男女間の格差をなくすためにどのようなことが有効であると筆者は考えているか。本文中の語句を用いてくわしく説明せよ。